

10年の歩みと 5年の歩みと

藤 田 善 彦

専任のスタッフとして基生研に参加してから5年が経過しようとしている。その前に昭和54年8月から客員教授の席をけがしていたから5年と言うのはあげ底があるとの御注意を受けるだろう。そのあげ底を今になって覗いて見ると、過去に見た悪夢を思い出すような気持ちに何となくなる。創設と言う言葉は甚だ前向きの心地よいひびきを持っているが、現実には部門創設の事に当って見ると、それはまったく地味な作業であって、その上、しばしば研究の進行そのものを犠牲にする事が強いられるものであった。客員教授としてははじめの一年間には、研究室作りとの戦いの思い出がもっとも強い。しかし、私がこの戦いに身を投じたのは、基生研が旧愛教大図書館の中に誕生してから2年以上も経過した後で、完全ではないにしても基生研の実験研究棟がすでに存在しており、まったくのゼロからの準備ではなかった。それでも私の頭の中には強烈な印象として残っている。毎年出る基生研の要覧を見ると、そのはじめの方に沿革として基生研の設立が計画され、そして実現され、それから10年間の歩みが事務的に淡々と述べられている。研究所設立の構想作り、そしてその実現への準備に携った諸先輩はもとより、調査室が文部省に設けられてから現在の体制までの創設・整備に当られた諸先輩は、淡々とした記述の一行一行に深い感慨を持たれているにちがいない。図書館時代の劣悪な環境と津波のように押し寄せる建設事務と戦いながらも研究の手をゆるめなかった諸先輩、とくに桑原元所長、故金谷前所長に畏敬の念を持つとともに、現在の卓越した研究環境を生み出されたことに深く感謝している。

この岡崎の地に移って5年が経過しようとしている。高度な実験設備のもとではじめて可能となるような研究テーマも夢でなく現実となって、光合成のもっとも物理化学的性格の強い初期エネルギー変換のしくみに挑戦する幸運をえた。すぐ隣りに分子科学研究所が控えており、高度な物理化学的手法による生体機能の研究を行う場として、世界第一級と言うことが出来よう。他方、それまで知る事の少かった動物学や分子生物学の世界の研究のあり方を、エキスパートの日常活動を通じて学ぶ機会にも恵まれた。とかく自分の領域に閉じこもり、血なまぐさい世界やむずかしい遺伝子の世界をまるで外国語の世界のような気持ちで見ていた私であったが、いつの間にかその外国語に親しみを覚え、未だ流暢に使えるには程遠いが、それを通して自分なりの新しい世の中を見る事が出来そうな気持ちを持つようになった。5年間で過ぎようとしている今、このようなハード、ソフト共に恵まれた環境にあって、それに見合う働き方をしているかと言う思いを強い緊張をおぼえながら持つ。

10年が経過し、基生研は今日の姿にまで成長した。創設に力を注がれた方々に感謝するとともに、そう言う先輩と一諸にその成長を祝う時であろう。しかし、同時に、この10年の歩みを改めて見直し、

次の10年への歩み方を考える時でもあろう。生物学研究のあり方，研究展開を支える思想が急速に転換しつつある最中でもあるだけに，研究所のソフト，ハード両面のよりのぞましいあり方の検討が強くのぞまれる。基生研の設立構想が練られ，それが創設に当って更に洗練されたものに仕上げられた時にはらわれたのと同じ努力が，基生研の次の展開へ向けて，今また必要なだろう。

(細胞内エネルギー変換機構研究部門教授)